質の高い学力を育てるための社会科授業の工夫
～言語活動の充実を通して～

社会科　　飯島知明　南岡俊之　吉田昂平

１．主題設定の理由

本学では小中高協同研究主題として「自立し協同する力を育む教育 ～コミュニケーション力を基盤として～」を掲げ，一昨年度より研究実践に取り組んでいる。社会科においてもコミュニケーション力の土台として，言語活動を重視した思考力・判断力・表現力の育成に努めている。ここで言う思考力・判断力・表現力とは，自ら課題を見出し，その事象について多面的・多角的に考察し，諸資料や仲間との対話や議論を通して自らの思考や判断を再構築してまとめ，それを効果的に発信していく力のことである。こうした質の高い学力を育てるために，また基礎基本を徹底するためにも，本校社会科は大阪府公立中学校社会科教育研究会（以下、府中社）とも連携して，「コの字」「四人グループ」を基本とした「協同的な学び」の手法を取り入れ，まずは「型」の習得に取り組んできた。

本校の社会科においても，いわゆる従来型の「知識注入型」や「一斉授業型」から「協同的な学び」の手法を取り入れた授業を実践することで，意欲的で主体的な学びの姿勢が多く確認することができた（実践事例参照）。自ら学び，共に成長する過程が生徒の中で実感でき，さらなる興味・関心へとつがっていく「協同的な学び」は個人思考と集団思考の相互通行を活発化させ，言語活動を中心とするコミュニケーション力の向上に効果的であることは注目に値する。

２．実践の概要

【実践事例１】

（１）題材

「世の中を解説＆提案しよう！」

（２）目標

様々な情報や資料を取捨選択し活用する力を養う。

社会的事象を多面的・多角的に考察し、考察結果を適切に表現する態度を育てる。

（３）学習内容

保護者（約 80 名）に事前にアンケート調査した「我が子に解説してほしい社会的事象」の中から中学生が「原発再稼働問題」・「伊丹空港の在り方」・「沖縄の基地問題」・「本当の幸せ」・「ＴＰＰの是非問題」などを選択し，主に新聞から情報収集を行い解説準備を進めた。

発表当日は保護者，そして隣接する附属小学校６年の児童も解説の判定（○×カード）に参加するなど，発表者にとって「本気の場面」を設定した。

また先生班が「世界の王室」を，そして生徒の母様班からも「お弁当の社会学（料理の実演あり)」,「緩やかなつながり」と題したサプライズ発表が飛び出すなど，生徒・先生・保護者，また社会相互の距離がNIEによって接近していることを内外に示す結果となった。[※5]

↑サプライズ発表準備をする保護者！

↑必要な情報を収集する中学生！

この学習では，当日の解説発表もさることながら，それまでの解説準備段階において，新聞を中心とした情報収集や情報選択，またはグループ内での対話や議論を通して社会的出来事を多面的・多角的に考察する過程に思考の再構築（練り上げ）が認められ,「受け身の学習姿勢」から「自ら進んで情報に迫っていく姿勢」や「知識と知識を連鎖させる姿」が随所に見られた。

↑「分かりやすかった！」　○！

↑お母様方による料理の実演！

また「中１ギャップ」の解消などをねらいとした小中連携の一つの切り口にもなると考えられる。小学生にとっては「世の中を解説&提案する」頼もしい中学生を目の当たりにすることで多少の不安が解消されるであろうし，中学生にとっても後輩や保護者に貫録や成長を　示す機会となり自分自身の成長も確かめることが可能となる。

この公開授業後に実施した保護者へのアンケート（46名回収）では，全員が「NIE活動で子どもの思考力が向上していると実感する。」と答え，NIE活動に関する自由記述では「新聞を読むことで生活全体に落ち着きが見られるようになった。」とか「各紙社説などの比較を通して重層

また公開授業を行った３年Ｄ組に「このような解説＆提案授業は楽しいか？」と聞いたところ，40名全員が「楽しい。」と答え，その理由に「知識を他者と交流することが楽しい。」や「自分が思考したことを他者に公開できるのが嬉しい。」といった回答があった。

原発、基地問題やりとり

大教大附属平野「ＮＩＥ」活動の公開授業

↑公開授業を報じる大阪日日新聞！

教育ルネサンス　新聞で動かす

親子で学び 深まる理解

↑読売新聞のコラムに取り上げてもらいました！

【実践事例２】

（１）題材

「ディベートをしよう！ ～ **討論道場** ～ 」

（２）目標

現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

（３）学習内容

①ディベートをしよう！（チーム戦）

テーマ「街中に防犯カメラの設置」「道州制の導入」「死刑制度」「クローン人間の研究」

	防犯カメラ		道州制の導入		死刑制度		クローン人間	
	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対
Ａ組	３班	(１班)	６班	(４班)			５班	(２班)
Ｂ組			６班	(３班)	(４班)	５班	(１班)	２班
Ｃ組	(５班)	３班	１班	(６班)	(２班)	４班		
Ｄ組	(３班)	６班			(１班)	４班	２班	(５班)

（表１）↑クラスごとの対戦表と勝敗結果（勝利班は◯）

ディベート後、ディベートをした班以外の生徒に、「どちらの主張のほうが説得力があったか」という基準で判定をさせた。自分自身が持っている意見ではなく、ディベートとしての「説得力」で判定するよう強調したが、やはり「説得力」というよりは生徒が持っている「価値観」などによる判定になりがちであった。反省としては、もう少し判定基準を項目ごとに明確化していく必要があると思われる。

↓ワークシートと感想

ディベートのテーマ「 防犯カメラ 」

	賛成側	反対側
立論	・警察によって管理 → プライバシー侵害なし ・犯罪減少のデータ 移動の場所で 大阪地検 ・大阪府警の考え ・犯罪抑止効果あり	・1台5000～1万円 → 費用がかかる ・犯罪 ― 抑止 ― カメラのない場所 　　― 記録 ― 証拠 （防げなかった 犯罪いたちごっこ） ・ダミーの設置 と それぜんぜん記録の裏付けとれないよ
反論	・金銭面 ― イギリス公は成功 　国のお金は国民の安全を守るもの ・事故は関係ない ・ダミーはバレるし本当に犯罪がおきたとき証拠ない ・人通りの多いところだけいらない	・小企業 → 管理費 ・寿命 ＝ お金 　トイレ / 財布 × ・警察の不祥事 → 信用ない 流出する恐れ ・人件費 ← 失業している人をやとえばよいのでは ・性能の悪いもの → 賠償金
まとめ	・お金 → もし本当に殺人がおこったら（イギリス）すれば人の命はお金にはかえられない ・いたち ごっこ 守れるものある と 不祥事があっても信用失墜ないと思いこんでいる ・企業内の話はまた別 ※ウム 防犯カメラ（賛）あしどりがつかめた	・安い防犯カメラ → ダミーと同じだよ？ と お金 ＝ 治安面に影響 ・全て防げていない 　夜は見えない → パトロール

全てなくす べきだという方向へ必要

＜感想＞

いざディベートをするとなると、とても緊張したけれど、作戦タイムをうまく使って話し合いができたのでよかったです。

数値のデータがあると説得力が増すけれど、数値の羅列になってしまうとそれがどのくらいの効果なのかが聞いている人に伝わらず、分かりにくい説明になると思いました。

分かりやすい数値を適度に使いつつ、言葉で説明するのが一番説得力があり聞いている人にも伝わりやすくなると思います。

今回発表して、反論やまとめは、相手の立論や反論によって、臨機応変に対応することが難しかったです。

相手や聴く側に上手く伝わるように伝えるのに難しく、緊張しました。

今まで、「道州制」というものがあるという言葉だけ聞いたが、道州制のメリットやデメリットなどたくさんのことを知ることができ、深く考えるきっかけになりました。

やはり、一つのことにおいて、上手くつり合うことのできる解決策を見つけ出すには、ディベートを行い、お互い理解し合えることだと思いました。

私自身、クローン人間にはあまり良いイメージを持ってなかったので、反対側の意見よりだったけど、反対側への反論もちゃんとしていて、最初から最後まで一貫して主張していた、賛成側の方が説得せいがあった。どちらも難しい言葉で説明することがあったので、もっと砕いてみんなに分かる言葉で説明してほしいと思った。

②ディベートをしよう！（個人戦）

テーマ「日本の小学校で宿題はいるのか？」（4人組）

「覆面レスラーが議員になったとき、議場内でのマスク着用はありか？」（6人組）

今回はテーマに対して、班の中で討論を行った。その班も1回目は4人班、2回目は6人班（7人班）で構成し、人数による違いも調査した。（アンケート結果参照）

さらにテーマを新聞やインターネットのトピックスから選び、テーマに関する記事を読んだうえで討論させた。また、討論を活発にするため、以下のようなルールをつくった。

1、まず各班リーダーを決める（6人班のときはサブリーダーも決める）

このとき、なるべく弁の立つ生徒がリーダーとなるように指示をする

2、リーダー以外の生徒（○）は自分の意見（賛成 or 反対）を主張する

たとえば、賛成（○○）vs 反対（○） や 賛成（○○○）vs 反対（　　）となる

3、リーダー（◎）は自分の意見がどうであれ、意見の少ない方の立場で討論する

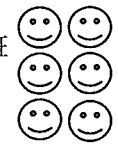
賛成（○○）vs 反対（○◎） や 賛成（○○○）vs 反対（◎）という状態になる

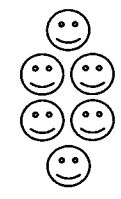
これにより、1つのテーマに対して多面的・多角的に考えることができ、討論に深みをもたせることができるのではないかと考えた。

以下は、討論の様子から感じたことである。

・4人班よりは6人班の方が様々な意見が出される。
・6人班は、さらに班が2つに分かれてしまうことがある。
・6人班は、人数が多いため、関係のない話へと脱線してしまうことがある。
・6人班は、端の生徒は参加しづらそうである。
・6人班は、1人いなくても、それなりに討論が成立してしまうので、やがて端の生徒から徐々にフェードアウトしていく。
・それぞれの顔が見えにくいと討論は活発になりにくい。6人班（A）よりは6人班（B）の方が互いに顔をみることができて、討論も活発。

4人班

6人班 (A) 

6人班 (B) 

・1つの資料などを見るときには4人班の方がよい。
・テーマによって盛り上がり方に差が出る。身近なテーマや自分に関係するテーマは盛り上がる。今回では、宿題は自身の経験から話やすいが、議会はイメージがつかみにくく意見

・すでに結論が出ている事柄は冷めやすい。今回では、覆面レスラーの議場内でのマスク着用は許可が出ているので、なかには「もう話し合う意味がない」と結論付けてしまう生徒もいた。
・1つのテーマにつき、15～20分程度がよい。それ以上長いと、関係ない話をしてしまう。
・討論の深まりのためには教師の力量も大きくかかわる。各班をまわりながら、討論が停滞している班には、意見が揺さぶられるような考えを話していく必要がある。
・ある程度結論が出た班では、立場を逆転させてみるとまた違った視点で考察できてよい。

↓アンケート結果

	4人	6人	両方	無回答
自分の意見を言いやすかったのはどちらですか？	103	22	15	1
みんなの意見が聞きやすかったのはどちらですか？	94	40	6	1
より多くの意見が聞けたのはどちらですか？	25	111	4	1
より深く思考できたのはどちらですか？	78	56	7	0
討論に参加しやすかったのはどちらですか？	98	30	11	2
討論はどちらでやる方がいいと思いますか？	70	62	7	2

アンケート結果より、4人班は人数が少ないので、互いの意見交流が活発に行えるために深く思考できると感じる生徒もいる一方で、6人班の方が人数が多いので、その分より多くの意見が聞けて深く思考できたと感じる生徒もいた。結果、自分が参加したと実感できるのは4人班だが、討論自体は4人班、6人班双方によい点があり、どちらがいいと結論付けることはできなかった。今後は、男女比や生徒の性格（おしゃべりな生徒や大人しい生徒など）など班の構成による違いにも着目していきたい。

③ディベートをしよう！（3連戦）

テーマ「優先制度 ～これって公正？～ 」

サブテーマ ［ＵＳＪの待ち時間短縮チケット］

［大学入試 ～女性枠は認められるべきか～ ］

［大学入試 ～その他の優先枠～ ］

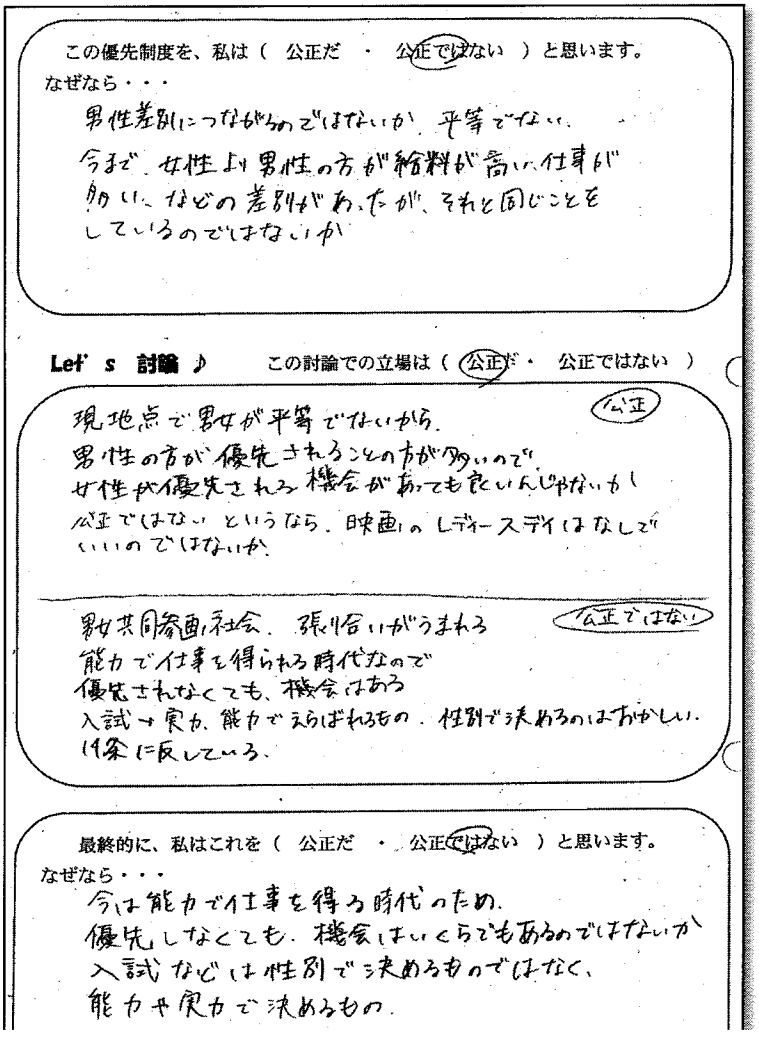
今回は1つの大きなテーマ「優先制度」を設定したうえで、3つの状況においてその優先制度は公正なのかどうかを各班で討論させた。討論は4人班で、ルールは個人戦のときと同じとした。

1つ目のサブテーマは、まず生徒にとって身近なUSJ（ユニバーサルスタジオジャパン）

しているのだから問題ない」「お金でサービスを買っているのだからいい」といった公正だとする意見などが出た。

2 つ目のサブテーマは、生徒も将来大きくかかわる大学入試の女性枠について討論した。これには、多くの生徒が「男女平等だ」「入試は実力の世界やから性別は関係ない」「逆に男性差別だ」というように公正でないという意見であったが、なかには「昔からあった男性と女性の差を埋めるためには多少必要」「女性研究者の発掘のためには必要」「大学側がほしい人材を求めるのは当然」と公正だと主張する生徒もいた。

3 つ目のサブテーマは、大学入試の優先枠「身体障害者、被差別部落出身者、在日コリアンなど」についてである。これは、女性枠のときとは一転して、「他の人より不利な面があり、勉強するにもその分苦労することが考えられるから」「大きなハンデを持っていて、スタート位置が違うのであれば、ゴール地点や経路も違うべきだ」とこの優先枠を公正だとする意見が多かった。なかには「特別扱いすることが差別につながる」から公正ではないとする意見もあった。


この優先制度を、私は（ 公正だ ・ 公正ではない ）と思います。
なぜなら・・・
男性差別につながるのではないか。平等でない。
今まで、女性より男性の方が給料が高い仕事が
多い、などの差別があったが、それと同じことを
しているのではないか

Let's 討論 ♪　この討論での立場は（ 公正だ ・ 公正ではない ）

公正
現地点で男女が平等でないから。
男性の方が優先されることの方が多いので、
女性が優先される機会があっても良いんじゃないか。
公正ではない、というなら、映画のレディースデイはなしで
いいのではないか。

公正ではない
男女共同参画社会、張り合いがうまれる
能力で仕事を得られる時代なので
優先されなくても、機会はある
入試→実力、能力でえらばれるもの。性別で決めるのはおかしい。
14条に反している。

最終的に、私はこれを（ 公正だ ・ 公正ではない ）と思います。
なぜなら・・・
今は能力で仕事を得る時代のため。
優先しなくても、機会はいくらでもあるのではないか
入試などは性別で決めるものではなく、
能力や実力で決めるもの。

カオスの深淵

選択のトリック ■■

入試に優先枠
平等？逆差別？

チャペルの赤いろうそくの炎が揺れていた。「私は視覚障害があります。右目は見えず、左目は見える範囲が針の穴より小さい」。女子学生の一人が、集まった学生たちに語りかけた。香川県善通寺市にある四国学院大学で、昨年12月の人権週間に開かれた「チャペルアワー」。

「実はまだ障害を受けいれきれてはいません。でも、できないことを伝えて、援助をお願いすることが大切ではないかと考えるようになりました」

男子学生が祈りを捧げた。「自分たちとは違うとされる人の声を聴くことを許されることを、感謝します」

四国学院大は、日本の敗戦の4年後に宣教師らが設立。現在、学生約1400人。小さな私大だが、「平和学」講座を日本でいち早く設け、身体障害者、被差別部落出身者、在日コリアン、沖縄出身者、アイヌなどを特別推薦入試で積極的に受けいれる「アファーマティブ・アクション入試」で知られる。

アファーマティブ・アクションは、1960年代のアメリカの公民権運動に端を発するとされる。周縁に追いやられてきたマイノリティーや女性を、優先枠を設けて採る差別是正の試みだ。アメリカの大学入試では逆差別だとして訴訟が起こされ、ハーバード大学マイケル・サンデル教授の授業の題材にもなっている。

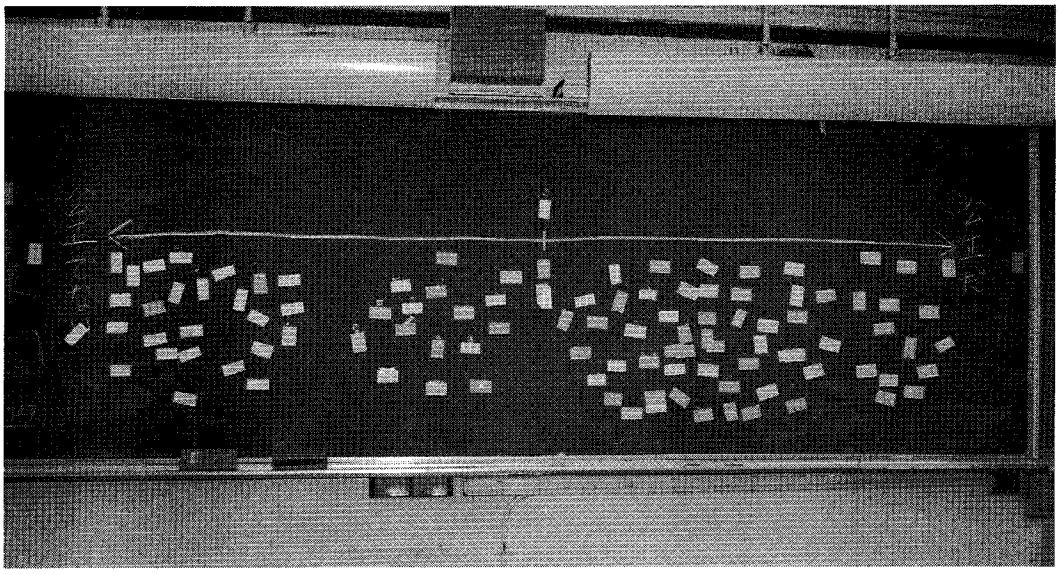
平等とは入り口の機会均等か、結果の平等か。公正はどう担保されるべきか。

四国学院大は、95年度入試からこの推薦枠を設けた。これまで年平均12人が入学。少ないためか、「不平等だ」という反対はなかったという。

末吉高明学長(63)は、70年代に米国アトランタの黒人の神学校に留学し、黒人の側からアメリカ社会を見た。親が教師だったので、「人権」を説く教師が、我が子の結婚では差別意識をあらわにする姿も知っていた。「差別語をなくせば差別がなくなるわけじゃない」。では、教育の場でほかに何ができるのか。答えの一つが、この制度だ。少子化でここでも定員割れが始まり、「教育機会の保障より、異者の共存、多様性確保の意味あいが大きくなった」と話す。

人を選ぶ場面で、公平と公正をいかにかなえるか。それは議員選挙でも問われ

3 つのサブテーマを討論したうえで、最後に「あなたにとっての公正のラインはどこですか？」と問いかけ、それぞれの考え方や価値観などを整理させた。同じ「優先」でも状況が違えば自分の中で変化する意見に悩む生徒が多かったが、どの生徒も自分なりに基準をもって公正のラインを決めていた。そして、3 枚の色紙（サブテーマごとに色分けをする）を渡し、それぞれが考える公正のラインを黒板に貼らせた。これにより個人の考え方や価値観を全体で共有することができ、そこから新たな自分の価値観を創造することができるようにした。



↑色紙を貼った黒板

↓あなたにとって公正のラインはどこですか？

ひげのことについてはお金を払うということをしているので公正であると思う。
男女の問題は長年意識されてきた差もあるが実際力の差はそこまでないと思うし差をなくすこともできるので男女で差をつけることは公正でないと思う。
その他の優先枠に関しては部落差別などの考え方次第でどうにかなるような問題については私たちは考え方を直していかないといけないと思うし優先制度は公正でないと思う。ただ、障害者の人など生まれもったりしたもので、考え方だけではどうにもならないことに関しての優先枠は良いと思う。

【実践事例３】

（１）題材

ＮＩＥ「新聞記事から考えたことを交流しよう！」

（２）目標

資料を適切に活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。

（３）学習内容

本授業は習得―活用―探求の学習過程のうち探求に重点を置き、ＮＩＥの一環で、定期試験において出題した問いを教材として使用した。定期試験では「資源とエネルギー」の単元における思考・判断・表現の観点をはかるために新聞記事を掲載し、「資料を読んで、今後の日本の貿易のあり方について１５０字以上で述べよ。」という問いを記述させた。[図１]　採点の際にクラス単位でこの取り組みへの賛成意見、反対意見、中立な意見を書いた生徒を授業の前段階としてピックアップした。実際の授業では、広義の思考力における事実判断・推理・価値判断の育成を目的として、授業を以下の三つの過程に分けて進めた。

最初に、事実判断の過程である。試験返却後にこの問いを再度確認し、事実判断の材料として、ラオスの生活や文化、日本のＯＤＡ（ＪＡＩＣＡ）における援助の現状について資料を用いて確認し、教科書の知識以上の情報量を提供した。その後、あらかじめピックアップしておいた生徒の解答をコの字型の隊形で発表させ、一つの資料からでも多面的・多角的な考察ができることを意識させた。[図２]

次に、推理の過程である。「なぜ、このような計画を練る必要があるのか」という発問を四人班で議論し、根拠を明らかにしてノートに記述させることで、言語活動を通したコミュニケーション能力や論理的思考力の向上を図った。その後、定期試験の資料は新聞記事の一部であることを伝え、[図３]の記事の全てを掲載したプリントから、この計画が日本の成長産業の後押しになっていることやこれまでのＯＤＡの取り組みについて触れた。

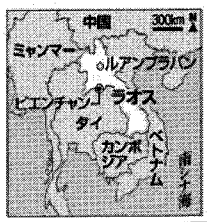
最後に、価値判断である。生徒の思考が精密で科学的な概念に捉われず、民主主義で生きるにふさわしい価値判断が出来るように、一つの考え方としてWin-Winを提示した。発展途上国と先進国という見方でこの取り組みについて考えた際に、考え方によってはWin-Loseもしくは Lose-Winとなり、より良い援助とは両国がそれぞれWinだと感じるものであると説明し、授業の終わりに感想を書かせて価値判断の基準の変化を読みとった。[図４]

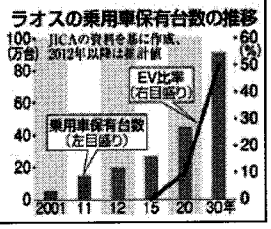
以上の内容から、新聞記事一つをとっても多様なものの考え方や価値判断の仕方があることを実感させられたのではないかと感じる。また、生徒の感想から納得的な知の蓄積と問題意識の成長を見取ることが出来た。しかしながら、授業全体を通して思考・判断に重点を置きすぎたため、表現力の育成が課題として浮き彫りとなった。授業時数や学習内容との関連から綿密な年

↓[図１]　定期試験で出題した資料（2013年１月７日（月）産経新聞　朝刊）

ラオスに「ＥＶタウン」計画

東南アジアのラオスで、日本の政府開発援助（ODA）を活用した電気自動車（EV）都市開発プロジェクトが2013年にも始まることが６日、分かった。日本のODAで首都ビエンチャンなどにEVの充電設備を集中的に設置。ラオス政府もEV購入に対する物品税などを減免し、30年には乗用車の国内保有台数の半数をEVに置き換える計画だ。実現すれば、日本が強みを持つ成長産業の後押しにもつながりそうだ。





寄せる。ラオスはタイや中国などの有望市場に囲まれており、「ラオスの各都市が東南アジアにおけるEVのショールームになれば、新興国への普及が加速する」（JICAラオス事務所）とされ、これまで大手２社が車両提供などによるプロジェクト参画に意欲を示しているという。

ODAと日本の成長産業をマッチングさせる試みは「教育や医療などの社会的支援が中心だった従来のODAに、パラダイム・シフト（劇的な変化）を起こす」（外交筋）との期待がある。日本総合研究所の三浦有史主任研究員は「支援先が経済成長を遂げることの重要性は認識されてきており、民間資本をODAで支える方式は増えるだろう」と予測している。

↓[図３]　授業で追加提示した記事の全文

（2013年１月７日（月）産経新聞　朝刊）

ＯＤＡ活用、日本の成長産業後押し

プロジェクトはラオス政府と国際協力機構（JICA）の現地事務所が進める都市開発計画の一環。実証事業として、ビエンチャンや古都ルアンプラバンの２都市で各約200カ所に充電設備を設置、それぞれEV40台を３年間、市民や地元企業に貸与する。実証事業によるモニタリングは今後のEV都市開発計画に生かす。

実証事業と併せ、ラオス政府は乗用車１台当たり購入額の最大160％分が課される輸入税や物品税などを、EV購入者に限り減免するほか、幹線道路でEV優先レーンを設けるなどしてEV需要を喚起する。ラオス政府からの正式要請を受け、JICAは来年度予算として外務省に16億～18億円の要求を検討しており、認められれば13年中にも一連の事業開始に踏み切る。

ラオスはメコン川の豊富な水量を生かした水力発電インフラが国内需要の30倍以上の発電能力を持ち、電気料金が安い。乗用車保有台数もまだ少なく、今後急速に普及すると見込まれており、ラオス政府とJICAはEVを中核にした都市開発を進めることにした。

国家主導のEV都市プロジェクトに、日本の大手自動車メーカーも高い関心を

↓[図４]生徒の感想

賛成意見	ラオスなど、日本よりも技術がおとる国に日本の技術の物資を援助するのは両国にとってとても良いことだと思います。被支援国であるラオスは最新の技術によって暮らしが豊かで便利になるし、支援国である日本は最初は資金などの面でマイナスになるかもしれないけど、外国へ支援することで注目されて、もっと日本の技術が認められるようになると思います。また、ラオスの特産物などを安く貿易できると思います。たくさんの国へ援助して、大変な国を救ってあげて、友好関係を強くすれば、日本が不景気の時や最近の東日本大震災など大変な状況にある時に救った国がきっと助けてくれると思います。自分の得だけを考えるより、先生の言っていたようなwin-winの関係を築ける援助を増やしてゆくべきだと思います。ただ、今、日本内で問題がたくさん残っているのが現状なので、バランスも大切だと思います。
中立意見	このラオスに「EVタウン」計画について、私は最初、日本は、自国で作った電気自動車が売れ、また、ラオスからの信頼性が高まり、これからも頼られ続けるという点で良く、ラオスは、電気自動車を使うことによって石油の消費を減らし、二酸化炭素の削減ができ、少しでも地球温暖化防止に貢献できるという点で良いと思いました。しかし、他の人の発表を聞いていると、やはり、ラオスにも自然があるので、発展していったとしても、国の雰囲気や景色に合わな

反対意見	このように、外国への支援で、何かを貸したり、あげたりすると、後々その被支援国がその時の支援をかえしてくれたりするのかもしれないけど、もし、その支援が予想どおりにでいまなくて、失敗したりした場合は、その支援をした国(日本)が責任をすることになってしまうと、その意欲がなくなってしまうのではないかと思った。

【実践事例４】

（１）題材

ＩＣＴ機器を用いた実践「アメリカの工業の変化をとらえよう！」

（２）目標

資料を適切に活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。

（３）学習内容

本校はＩＣＴ機器を十分に活用できる環境が整っており、ほぼ全ての教室でパソコンやビデオ、ＤＶＤを用いた授業展開が可能である。このことから、主に以下の二点をねらいとして授業実践をおこなった。

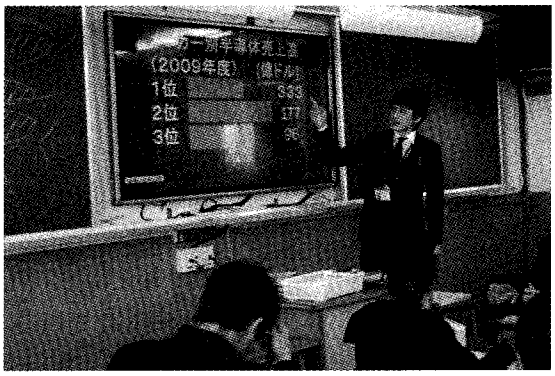
第一に、思考力、判断力、表現力の育成である。授業において、共有課題やジャンプの課題を設定し、それらについて意見を交流することは言語活動の充実を図る上で非常に有効である。しかし、ワークシートに課題を書き込んでおく、板書に時間を割く、言葉だけで課題を伝えるとなると本来のねらいとは違った方向に行きかねない。そのため、電子黒板でパワーポイントを使用し、授業の流れの中で自然に課題と向き合っていけるような環境づくりをねらいとした。

第二に、資料活用の技能の育成である。中学校学習指導要領社会科目標に「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」とあるように、社会科では資料を適切に選択・活用できる能力を身につけさせることが必須である。しかしながら、資料を見て情報を得ることは出来ても、資料と向き合いその資料が持つ情報を多面的・多角的に読み取ることのできる生徒は少ない。そのため、パワーポイントやペンソフトを用いて資料をただ単に「見る」のではなく「読み解く」ことをねらいとして授業を実践した。

授業の前段階においては、パワーポイントを作成する際に色の使い方や文字の大きさに配慮し、画面が見えない生徒を一人も生み出さないよう努めた。具体的には日光の当たり具合にも対応できるように使用する色を出来るだけ淡泊なものにし、背景に

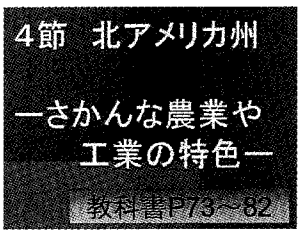
本授業では、最初にテーマとして「なぜアメリカやカナダは農業生産力だけでなく工業生産力も高いのか」と提示し、授業の最後でこのテーマについて考えさせた。[図１]　また、前時で知識・理解中心に進めていたことから、本時では思考力・判断力・表現力の育成という観点からアメリカの文化と工業に焦点をあて、共有課題として「アメリカの大量生産、大量消費における問題点は何か」を、ジャンプの課題として「アメリカの工業の中心はなぜ南部と西部に移ってきたのか」を設定し、コの字・四人グループで取り組んだ。[図２]　他にも、資料活用の技能の育成という観点から半導体の売上高ベスト３の企業を予想した。[図３]　その後、「シリコンバレーの人口構成」の円グラフをパワーポイントで提示し、透明ボードを用いてそこからヒスパニックやアジア系移民が多い理由について考えさせたところ、アフリカの人々が少数ではあるが存在する理由をヨーロッパ諸国によるアメリカ大陸の支配と結び付けて考えている生徒がいた。　[図４]

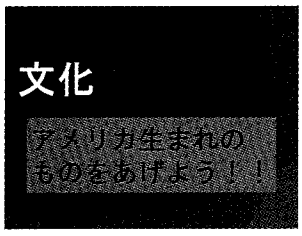
↑[図２]コの字での各班の発表の様子

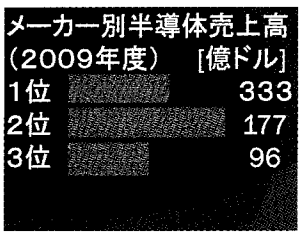


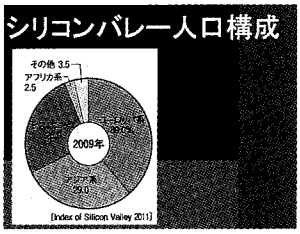
↑[図３]半導体売上高ベスト３の企業を予想

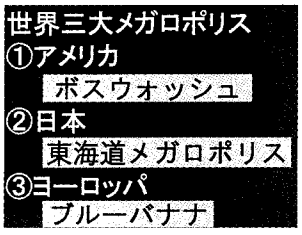
↓[図４]授業で使用したパワーポイント（一部抜粋）

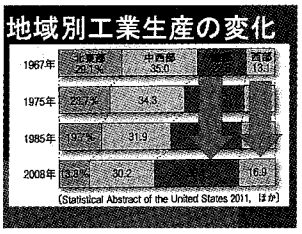


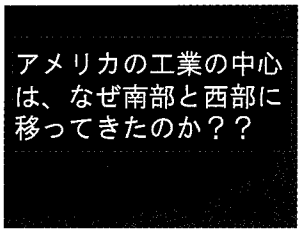










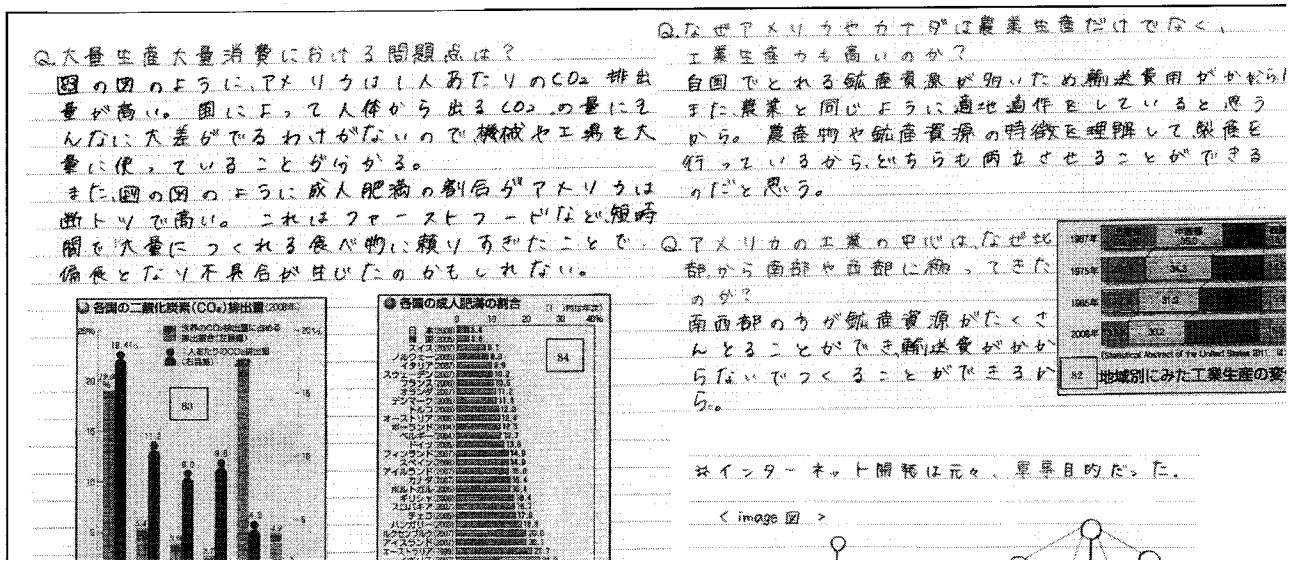


戸惑うことなくそれぞれの課題に取り組めていた。資料においても、シリコンバレーの人口構成のグラフから多面的・多角的に思考出来ていたことから、授業で使用する資料において特に読み取ってほしい部分をパワーポイントやペンソフト用いて強調することは有効であると考える。[図5]

課題としては、作成したパワーポイントで電子黒板に映した内容を板書として扱うような知識・理解中心の授業やパワーポイントに授業の流れをすべて盛り込んだ授業であると、教師不在の機器任せの授業となってしまい、さらに機器がうまく作動しない場合は授業を行えない可能性が生まれるといったことがあげられる。実際にこれまでの授業において、提示したい写真や資料など情報量を多く盛り込み過ぎたために生徒の知識の定着につながりにくかったり、本来板書すべき内容をパワーポイントで提示して画面を次のスライドに映すと前のスライドが消えてしまい予定していた授業内容と生徒の書き写す時間との間にジレンマがあったりした。そのため、板書・ＩＣＴ機器のそれぞれの利点と欠点を踏まえ、実際に検証していくことが課題である。[図６] いずれにしても、ＩＣＴ機器を使用した授業を展開する際はデジタルとアナログの併用が求められる。

設備面においては、生徒の意見から、日光の当たり具合や角度によって見え方が異なり、特に教室で窓際や廊下側の座席からは光の反射で見えにくいことが判明した。これには教室の明るさを少し暗くするなどの対応が考えられるが、そうすると電子黒板に投影した内容を一生懸命にメモしようとする生徒の視力低下につながる。そのため、普通教室に電子黒板やテレビを設置する際には、あらかじめ日光の当たり具合や光の反射を視野に入れておくことが必要となる。これらハード面の課題をクリア出来た上で、今後の展望として、東芝とインテルの共同開発による教育用タブレットＰＣを用いて生徒の意見を班ごとにまとめて発表する新たな形の「共同的な学び」を実践したい。

↓[図５]生徒の授業ノートの一部



↓[図６]板書・ＩＣＴ機器の主な利点と欠点

	板書	ＩＣＴ機器
利点	・書いた文字を残すことが出来る。 ・生徒の意見を集約しやすい。 ・メモや図解が出来る。 ・生徒だけでなく、教師の頭にも知識として残りやすい。	・写真や資料の提示、映像や音楽の使用が可能。 ・導入で用いると興味・関心がわきやすい。 ・順序立てて授業構成を練りやすい。 ・生徒から出た意見を即座に調べて提示できる。 ・机間指導を行いやすい。
欠点	・書くのに時間がかかる。 ・出来事の背景や風景をイメージしづらい。 ・ノートをとることに気がとられる。 ・体が邪魔で見えないことがある。	・提示した画像や文字を残せない。 ・座席によっては見えにくい。 ・環境が整っていないと準備物が多い。 ・ＩＣＴ機器を使うスキルが必要。

３．成果と課題

成果として，新聞を活用し、「協同的な学び」の手法を取り入れることで，生徒が社会に興味・関心を持ち，自ら積極的に情報へ迫る姿勢がこれまで以上に認められた。また他者の意見や考え方に触れることで自分の考えを再構築し，他者に伝えるために表現の工夫をする姿が伺えた。また，教師としては評価の観点でもある思考・判断・表現や資料活用技能を一連の流れで見取ることが可能となる。そして他者理解が進むことで，「様々な距離」（生徒と社会，仲間同士，生徒と先生，生徒と保護者，保護者と先生等）が接近し，良好な人間関係の構築にも役立つことが実感できた。一方，課題として教師にとっての経済的，時間的負担が挙げられる。NIE プリントを取り扱う際の教師の力量（記事選択力・展開力）や課題の設定力も問われる。さらに社会科だけで行うのではなく，全校挙げての取り組みに発展することができれば，教育効果は増すが，教師間での共通理解を図るには相当のエネルギーを要する。